令和4年度　大阪偕星学園高等学校　評価報告書

1　めざす学校像

人(生徒)は皆、星であり、生徒一人ひとりの個性を大切にし、かけがえのない存在としてその可能性を伸ばし、鍛えていく。生きる力を養う教育、個性を大切にする教育、共生教育。

- 常に教務の研鑽に努め、生徒一人ひとりの学力向上を図る。
- 生徒の個性と人権を尊重し、全人的な教育を実践する。
- 学園内の整備と美化に努め、より充実した教育環境を提供する。
- 進学・就職など、卒業後の生徒の進路を全力でバックアップする。
- 保護者の方々の意見を尊重し、学園運営に反映させる。

2　学校教育自己診断における結果と分析[　令和4年11月　実施分　]

実施対象は全学年生徒、保護者とした。回答は無記名、質問はアンケートと自由記述で実施した。保護者の回答率は93%、生徒の回答率は97%と高かった。保護者については、肯定的と捉えることができるAとBの和がほとんどの項目で7割以上に達しており、8割・9割以上の回答も増えてきている。また、生徒の回答についても肯定的回答がほとんどである。しかしながら、保護者に比べると満足度は決して高いとは言えない。生徒からの意見を精査し、更なる向上に努めなければならない。

回答率(回答数/在籍数)
生　徒　　1年:98%(220/224)　2年:97%(273/282)　3年:97%(311/320)　合計:97%(804/826)
保護者　　1年:95%(213/224)　2年:88%(249/282)　3年:95%(304/320)　合計:93%(766/826)

※学校関係者評価委員会からの意見

【 令和4年7月22日(金) 】

・人権委員会は具体的に何をしているのか。
→　出身地差別、性差別、いじめ、ハラスメントなど全てを対象にしている。また、目安箱の校内設置やいじめアンケートの実施などにより、生徒からの声を拾い上げるようにしている。その他には、スクールカウンセラーに定期的に来校してもらっている。

・スマートフォンなどの利用がそれほど得意でない高齢者を中心とした地域の人々と、それらの利用に精通している生徒との地域交流は可能か。
→　スマートフォンの利用に関しては、高い利便性がある一方で、SNSなどのトラブルに巻き込まれる生徒がいるため、現段階では生徒がそれらの扱い方を学んでいるところである。

・奨学金関係や生徒指導なども担任が主となって対応しているようだが、担任の負担が多くなっていないか。また、担任へのサポートはあるのか。
→　奨学金関係の手続きに関しては各担任で十分に対応できている。加えて、担任には副担任が付いてサポートする体制が整っている。

・スマートフォンの利用に関してルールはあるのか。
→　基本的に授業中は電源を切ってカバンにしまうというルールがある。ただし、授業によってはスマートフォンを使った学習を許可するものもある。現在のところ、学校でのスマートフォン利用で大きなトラブルは起きていない。

・クラス替えを行うことのメリットとデメリットどちらが大きいのか。
→　クラス替えを行うのは生徒各自の進路選択のためであり、人間関係の良し悪しの問題ではない。クラスに合わない生徒がいるなどのデメリットは各ケースごとに対応している。

【 令和4年11月25日(金) 】

・全校生徒中、クラブ活動に参加している生徒の割合はどの程度か。
→　各学年のスポーツコースとその他コースを合わせると5割程度がクラブ活動に参加している。

・学年毎で欠席遅刻の数が異なっている(特に、2年生の欠席が多い)が、何か学年ごとの傾向があるのか。
→　2年生は中弛みが起こりやすいと言われている。それに加えて、本校では中学時代不登校だった生徒が1年次を何とか終わらせた後、2年生で不登校に戻ってしまうという事例も見られる。

・パソコンなどICT機器の導入に対する教員の反応はどのようなものか。
→　本校では教員にパソコンを貸与している。中にはICT機器の使用に苦労している教員もいるが、校内のWiFiを利用して自身のパソコン等を授業に利用している教員もいる。また、ICT機器を使ってペーパーレス化に取り組む教員もおり、ICT機器を利用することで板書の時間を減らし、授業を効率的に行っている。

・3年生の図書室利用が減っているのは、教室配置と関係があるのか。
→　図書室は特進コースの生徒が自習で利用することが多い。しかし、今年度は特進コースの教室が図書室から遠くなり、利用者が減少した。

【 令和5年3月10日(金) 】

・評価資料に受診勧告を受けた生徒の受診率が10%とあるが、これは何を意味しているのか。また、各項目の受診率の目標も10%だが、この目標数値は低くないか。
→　学校での健康診断の結果を受けて受診勧告を受けた生徒の内、10%のみが受診したという意味になっている。受診勧告自体に強制力がなく、受診するかは親の判断に拠っている。受診率100%が望ましいが、過去の数値から考えて、目標が10%は妥当だと考えている。

・LGBTQに関する人権教育は行っているのか。
→　LGBTQを特に取り上げての人権教育はしていない。しかし、次年度より女子生徒もスラックスの着用が可能になる取り組みは行っている。

・現在の大学の序列からすると、関関同立という用語を使用することに違和感はないのか。具体的には関西学院大学が近畿大学に抜かれている感じがある。
→　関関同立という用語は序列というよりも慣用的に使っている。

・不登校の生徒に対して教員だけでなく、入試広報室の職員も声掛けをしていて素晴らしいと感じている。こういった不登校への対応をもっと学外へアピールするのがいいのではないか。
→　教員と入試広報室の職員との連携を大事にしている。今後はこれを継続させながら、学外へのアピールも検討していく。

3　本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の重点目標	具体的な取り組み内容	評価指標	取組内容の自己評価
取り組み①	学力の充実と進路希望の実現	①生徒達の理解度や進捗状況を丁寧に確認し、「わかりやすい授業」をする。また、定期考査は勿論であるが、模試の結果も教科としてしっかりと把握し、生徒たちの学力向上に努める。	①学校教育自己診断による、「授業はわかりやすい」の項目での肯定的回答70%以上	①担当者同士の連絡を密にしていくことや、定期考査の結果については把握できている。模試の数値については、教科として取り組むまでにはいたっていない。学校教育自己診断による、「授業はわかりやすい」の項目での肯定的回答は72%だった。1年生が80%、2年生が69%、3年生が69%であった。昨年度に比べ、各学年とも数値としては上がっている。PCを利用しての授業が増加したことが要因であると考えられる。よって、次年度からもPCでの授業展開を増やしていくことが良い結果につながるのではないかと考える。
		②生徒の進路実現のため、個々に応じた対策講座やガイダンスを実施していく。また、習熟度別の放課後講習、夏期講習を実施し、柔軟に対応していく。	②進路決定率95%以上。	②進路決定率は93.8%となり未達であった。もう少し早い段階から進路目標に向かって取り組んでいく必要がある。進学実績としては、関関同立31名、産近甲龍67名、摂神追桃99名と、まずまずの実績を収めることができた。次年度についても、3年間のスパンでの講習の在り方や組み方を再考し、質の高いフォローアップ体制を構築していく。就職については例年並みであった。就職面で求人票閲覧のデジタル化を導入するも、システムの不安定等が生じた。よって、業者選定等において改善の余地がある。
取り組み②	生徒指導の充実	①頭髪違反率を低くすることを、各クラスが意識していくようにする。	①毎月の頭髪違反率3%以下	①違反率0.5%
		②8時30分に自教室で着席しておくことを、習慣化していく。	②毎月のSHR遅刻率0.5%以下	②SHR遅刻率0.5%
		③毎日の学校生活の中で、生徒の規範意識が高まるよう、全教員が細かな点まで確認していく。	③懲戒処分者数50名以下(延べ人数)	③懲戒処分者数31名（延べ人数）
		④交通ルールやマナー、モラルに対する意識づけを日頃からしていく。	④外部からの苦情35件以下	④外部からの苦情13件（昨年度24件）
		全教員によるきめ細かい積極的生活指導・マナー（モラル）指導を推進し、生徒の規範意識を向上させ、問題行動の未然防止に努める。特に、「時間を守る」「ものを大切にする」「他者を尊重する」 に重点的に取り組む。		懲戒処分者数が昨年度より20名減少、外部からの苦情についても昨年度は24件であったのに対して今年度は13件と減少はしている。頭髪指導に関しては、学校全体が良い方向に向かうために、これまでの良い伝統を継承しつつ、他校の例なども参考にしながら更に新しい方法を模索していく必要がある。SHR遅刻については、8時30分に教室でHRを受けるため、時間的な余裕を持つことを今後指導していく必要がある。懲戒処分者数が減少したことは良いが、内容がどうであったかも重要である。
取り組み③	学校組織運営の活性化	①各種奨学金募集に関する情報発信をおこない、生徒及び保護者の奨学金に関する認知度を高めるとともに、教職員の奨学金に関する知識を深める。	①学校教育自己診断による「学校は、奨学金制度についての情報を知らせてくれる」の項目での肯定的回答70%以上	①学校教育自己診断による「学校は、奨学金制度についての情報を知らせてくれる」の項目において、肯定的回答が80%であった。本校に案内のあったすべての案内をメール配信し、ホームページに掲載。申し込み業務などについては問題なく処理されているが、奨学金の内容や生徒の利用状況等が担任が把握していないのが現状である。担任が、生徒個々の利用状況等を把握するとともに、各種奨学金に関する知識を深めることも必要である。
		本校がどう変わっていくのか、変えていくのか、中学校や塾に対して説明し、信頼を回復することが何よりも重要である。令和3年度、特に受験生が減少した中学、塾、エリアについては、その点を強化し受験者数を増やしていく。	②募集定員を確保する 特進コース(40名) 文理進学コース(60名) 進路探究コース(130名) スポーツコース(90名)	②入学者数は、特進コース(17名)、文理進学コース(35名)、進路探究コース(124名)、スポーツコース(120名)であった。特進コース、文理進学コースが募集定員に対し大幅に届いていない。特にこの2コースの訴求方法の改善が必要である。勿論、中学生が入学したい！と感じるような各コースが新たな魅力・取り組みを作っていくことも必要だが、それらが営業活動や入試イベントで伝わるように改善していきたい。
		③オープンスクールや入試説明会、毎日見学会等の参加者を増やしていくと同時に、参加した中学生の受験率を上げていく。そのために各種イベントの内容充実化を図るとともに広報担当者と全教職員の入試イベントに対する意識を高める。	③各入試イベントの受験率10%アップ（前年比）	③オープンスクールや入試説明会の来場者数は、全ての回において昨年度を上回ることができた。オープンスクール（前年比119.5%）入試説明会（前年比111.4%）。目標としていた受験率10%アップに関しては、全ての回で過去最高の受験率となったものの、オープンスクール（前年比6.5%アップ）入試説明会（前年比2.5%アップ）となり、目標値未達となった。今年

				度、新たな取り組みで実施した入試イベントについては、効果が出ているものの、コースにより受験率に差が出ているため、それぞれのコースの学力層に見合った打ち出し方、イベント内容の変更が必要。 毎日見学会に関しては、124組が来校。昨年に対して＋12組と微増であったが、受験率が59.7%となり、対応した数多くの中学生が受験に繋がった。